

第6回 情報社会における国土・地域の成長と進化のあり方研究会 議事録

件名	情報社会における国土・地域の成長と進化のあり方研究会 ～情報生産の場“情場”研究会～ 第6回研究会	
日時	2015年1月22日(木) 14時00分～16時00分	
場所	国土交通省 中央合同庁舎第二号館11階 国土政策局会議室	
研究会メンバー (敬称略)	青木 敏隆	一般財団法人 国土計画協会 常務理事
	石井 喜三郎	国土交通省国土交通審議官
	小笠原 伸	白鷗大学教授
	小川 眞誠	特定非営利活動法人日本心身機能活性療法指導士会理事長
	梶原 拓	健康医療市民会議代表
	北本 政行	国土交通省大臣官房審議官(国土政策局担当)
	黒川 弘	公益財団法人 自転車駐車場整備センター 特別参与
	澤田 潤一	公益財団法人 日本生産性本部公共政策部長
	品川 萬里	福島県郡山市長
	高橋 進	一般財団法人 住宅生産振興財団 会長
	中島 健一郎	大正大学 客員教授、(株)ACORN代表取締役
	濱 博文	大和ハウス工業株式会社執行役員経営管理本部渉外部長
	福井 秀夫	政策研究大学院大学教授
	藤井 健	国土交通省関東地方整備局副局長
	本東 信	国土交通省国土政策局長
	松下 哲夫	株式会社市場経済研究所 主任研究員
	森反 章夫	東京経済大学教授
	芳原 保	岡山県岡山市政策局東京事務所長 (大森市長の代理)
ゲストスピーカー (敬称略)	宮原 秀夫	一般社団法人ナレッジキャピタル 代表理事
	高橋 豊典	一般社団法人ナレッジキャピタル 事業統括部長
助言者 (敬省略)	橋本 大二郎	元高知県知事
研究会幹事 (敬称略)	青木 由行	国土交通省総合政策局政策課長
	甲川 壽浩	国土交通省 国土政策局広域地方政策課長
	榊 真一	国土交通省 都市局都市計画課長
	白石 秀俊	国土交通省 国土政策局総合計画課長
	中原 淳	国土交通省総合政策局参事官(社会資本整備担当)
	林 俊行	復興庁参事官
事務局	国土計画協会(江藤) 地域開発研究所(瀬戸) みずほ総合研究所(堀江、小宮、丸山、水野)	
配布資料	資料1:研究会メンバー一覧 資料2-①:新たな国土形成計画(全国計画)中間整理 概要 資料2-②:新たな国土形成計画(全国計画)中間整理 資料3:新しい価値創造拠点 ナレッジキャピタル (追加資料):〈国土・地域空間の変容〉レジメ案 (参考):第5回研究会の議事概要案	

国土交通省国土政策局会議室において、情報社会における国土・地域の成長と進化のあり方研究会を開催した。

1. 開会

- ・ 事務局(国土計画協会)より開会の挨拶と配布資料についての確認を行った。
- ・ 国土交通省の本東局長より、新たな国土形成計画(全国計画)中間整理について、資料をもとに説明があった。

2. 議事

(1) 新しい価値創造拠点 ナレッジキャピタル

- ・ 一般社団法人 ナレッジキャピタルの宮原代表理事よりナレッジキャピタルの基本コンセプトや活動内容について、同じく、一般社団法人 ナレッジキャピタルの高橋事業統括部長よりナレッジキャピタルの施設概要や参画団体等について、資料をもとに説明があった。

(以下、宮原代表理事発表分の要旨)

【基本コンセプト】

- ・ うめきたの街を、知の循環によって、豊かな未来生活を創出する街である“創造の宮”にしたという思いが根底にある。“創造の宮”は、知の集積によって形成される“場”(ナレッジキャピタル)を核として、従来の街づくりとは異なる、新しいコンセプトに基づいて構築される新しい街である。
- ・ ナレッジキャピタルは、「サイエンス」、「テクノロジー」、「感性」、「アート」の「知」を集積・融合させることで新たな「知的価値」を創出するイノベーションを起こす(科学×技術×感性=新しい価値)「場」として機能する。このような場は、産学官の強力な連携により初めて実現できるものである。
- ・ また、得られる効果としては、ナレッジキャピタルのコンテンツによる集客効果、周辺の施設への集客につながる相乗効果、参加している企業のイメージアップにつながる宣伝効果、ユーザー指向の製品開発のノウハウの獲得、新たな分野を開拓する新たな人材の育成などが挙げられる。
- ・ ①皆で面白い、楽しいことをやる、②センスのある若者を育てる、③あれこれ言わずに、とにかくやってみる勇気と元気をもつ、の3点がナレッジキャピタルの実行の精神である。
- ・ ナレッジキャピタルを実行するモデルとして、次の産学官連携モデルを考えている。まず、企業は出資を行い、大学が人材や知を提供し、行政が規制緩和等を行うことにより、ナレッジやノウハウを蓄積させ、人を集積させる。その結果、企業は、より有能な人材の確保が可能となり、自社には無かった新しいノウハウを獲得することができるようになる。企業にとっては、直ちに直接的なリターンを期待するのではなく、スパンが長い、間接的なリターンを求める

企業マインドの醸成が課題となる。

【これまでに実現している機能】

- ・ 実際には(1)人の交流の場(サロン機能)、(2)The Lab.～みんなで世界一研究所～、(3)可視化センター(VisLab OSAKA、科学技術を見える化して展示する場)の3つの機能が実現されている。これらの“知的機能”を集積することにより、異分野間での人材交流の促進を図り、新たなイノベーションの創出につなげることこそが、ナレッジキャピタルの機能である。
- ・ ナレッジサロンは、年間約10万円の会費が必要であるにも関わらず、会員数は約2,000人にのぼり、入会待ちの状態が続いている。実際のサロンでは、部屋をガラス張りにして、外から室内の様子が見えるように設計している。
- ・ 会員の自主運営で木曜サロンという勉強会のようなイベントを開催しており、飲み物代の1,500円だけ徴収し、参加しているメンバーの中からボランティアでスピーカーを選び、話をしてもらっている。
- ・ フランスの某市の市長が視察に来たことがきっかけとなり、日本とEUの共同出資によるICTを駆使したスマートシティの実証実験プロジェクトがスタートした。
- ・ The Lab.～みんなで世界一研究所～では、「人材育成・イノベーションにつながる面白いこと」をコンセプトとし、様々な企業・大学の技術・商品を紹介している。様々な企業が展示をする中で、たまたま隣り合ったブースで展示をしていた企業間に連携が生まれた事例もある。
- ・ VisLab OSAKAでは、様々な物事・現象を可視化する技術を用い、自然現象やDNAの構造などを科学的データに基づいて可視化して展示している。展示により、一般の方の理解も深まり、子どもの理科離れや新市場・新製品開発のヒントとなることができる。これまでに、眼鏡無しで見える3D映像の展示や、イタリアのフィッツィ美術館と協力したテラヘルツ波によるルネサンス絵画の調査・講義等を行っている。

(以下、高橋部長発表分の要旨)

【ナレッジキャピタル建設の経緯】

- ・ ナレッジキャピタルは、梅田貨物駅用地の先行開発区域開発事業により建てられたものである。開発事業者は公募で決められ、2010年に着工し、2013年に竣工した。
- ・ グランフロント大阪(ナレッジキャピタル)の開発事業者は全12社で構成され、一般社団法人ナレッジキャピタルが直営事業の企画・運営や外部連携等の推進を、株式会社KMOが施設管理と事業開発を行っている。
- ・ 企業だけで発展していくのは難しいため、行政や大学にもナレッジキャピタル推進後援共同体として参画してもらっている。
- ・ ナレッジキャピタルの施設は、グランフロント大阪のタワーB・Cの1~13階の内の一部を使用している。

【活動内容の紹介】

- ・ 「The Lab.～みんなで世界一研究所～」では、参画している14団体の企業や研究機関の技術や活動を、楽しく、分かりやすく展示している。出展者と来場者がコミュニケーションをとることで、新たな創造力を生み出し、次の「世界一」につなげようとしている。
- ・ 企業や研究機関、大学、行政など20団体が参画する「ナレッジオフィス」では、産学官連携を目的とし、人材・知財・情報の集積拠点となるオフィススペースを目指している。
- ・ 「フューチャーライフショールーム」は、企業や大学等が一步先の未来を提案し、企業とユーザーが「関係性」を構築することを目的とした、ユーザー参加型のショールーム・ショップである。現在、計21団体が参画している。
- ・ 「コラボオフィス」では、3カ月単位で部屋やブースを貸し出しており、国内外の企業や研究機関のサテライトオフィス、ベンチャー企業のオフィスなどとして、42団体が参画・利用している。コラボレーションを目的とした活動拠点となることを目指している。別途、若手のクリエイターなど次世代人材が活躍するためのコワーキングスペースである、「コラボオフィスnx」を設けており、47名が登録している。
- ・ 分野を越えた出会いと交流を通じて新たな価値創造を目指す会員制サロンである「ナレッジサロン」には、2,030名が登録している。プロジェクトの立ち上げや、ニーズに応じた企業・人との出会いのサポートも行っている。1日に約600人の利用があり、多岐に渡る業種の人々が訪れている。
- ・ 貸館スペースとして、380名規模の多目的シアター、会議室、最大約3,000人が収容可能なコンベンション施設、イベントスペース等を用意している。
- ・ 海外との連携という意味では、類似施設を作るための参考として、参画している団体とのコラボレーションを希望して、大学で学ぶ人の視察などを目的として、海外から人が来ることが多い。

【これまでのイベント紹介】

- ・ 2013年4月26日～9月1日に開催した「THE 世界一展～魅せますニッポンの技と人」というイベントでは、世界に誇れる日本の技術を集めて展示していた。
- ・ 2013年5月2日～5月12日には、大阪大学の技術を応用し、吉本新喜劇とコラボレーションした、ロボット演劇版「銀河鉄道の夜」も開催した。
- ・ 夏休みには子どもを対象としたワークショップを開催した。随時、大人向けのワークショップも開催している。
- ・ 日本のみならず、海外の芸術系、情報メディア系の大学や大学院、また専門学校の学生を対象にした国際的なアワードである、INTERNATIONAL STUDENTS CREATIVE AWARD (ISCA)も過去2回実施している。
- ・ 2015年3月26日～3月29日には、KNOWLEDGE CAPITAL FESTIVAL 2015の開催も予定しており、ナレッジキャピタル参画者による「革新的な行動を表彰するKnowledge Innovation Awardや、世界中のOMOSIROI活動やアイデアを表彰するWorld OMOSIROI Awardの表彰を行うほか、アートイベントやトークプログラム、ワークショップとい

ったイベントを用意している。

■質疑応答

(品川市長)

- ・ ナレッジキャピタルの説明を聴かせていただき、夢を見させていただきました。郡山市にも、規模は小さくてもよいので、ナレッジキャピタルのような機能を導入したい。是非、わが市にも講演にきてほしい。他の自治体でも興味を持たれているところがあるのではないか。

(宮原代表理事)

- ・ 某市の市長から問い合わせがあった。大阪と地方都市では人口や予算の規模が全く違うためどうすればよいかという相談を受けた。酒蔵が多い地域であるため、酒蔵を解放して若者のサロンにしてはどうかと提案した。
- ・ グローバルなことをやるだけでなく、世界に向けて情報発信していくことが大事である。世界の人々は、情報収集に関してアンテナをしっかりと張っていると思う。
- ・ グローバル化を意識的に行うのではなく、自然と世界標準に近づくように設計しないと上手くいかないと思っている。世界標準から外れすぎていると、世界に広まっていけない。
- ・ 一般社団法人が単独で活動するのではなく、共同で事業を行う企業を設立し、その企業で資金の工面を行うという体制を作ってもらっており、目先の利益をあまり気にしなくてよい環境があるからこそナレッジキャピタルは成り立っている。

(梶原座長)

- ・ 国交省より説明いただいた新たな国土形成計画の中間整理の中にも「対流拠点」という記述があったが、これがグランフロント大阪に該当するものと思われる。今後、郡山に地方都市の既存の施設を利用したフロントのモデルをつくり、全国に広めていきたい。
- ・ 啓蒙しつつ、施設を作らなければならなかったから、本当に苦労されたと思う。そのあたりの話を聞かせてほしい。

(高橋部長)

- ・ マスコミの人にもコンセプトを説明しても理解してもらえなかった。早い段階から海外との連携を考えていたが、海外の方がコンセプトに対する反応が良かった。香港などは、日本でうまくいかなかったら、香港で実現できるよう場所を用意する、と言ってきたほどであった。

(梶原座長)

- ・ 海外は世界の流れに乗るのが早い。日本人は頭が固く、意識が遅い。ぜひ、モデルを作って主導して行ってほしい。

(宮原代表理事)

- ・ グランフロント大阪を建設する際、コンペは住宅・商用施設の部分と、ナレッジキャピタルの

部分で分けて行くという特殊な方法で行った。ナレッジキャピタルの業者はコンセプトを重視して選定した。

- ・ コンセプトに沿った、身の丈に合ったものを作っていきたい。今持っている施設を活用する、というのは良い方法だと思っている。

(黒川特別参与)

- ・ 駅から歩いて行ける範囲にあり、全ての施設を歩いて回れることが素晴らしい。市民が参加する際にも、歩く範囲にまとまっているということが意味を持つてくるのか。

(宮原代表理事)

- ・ 大阪駅を改装した際、2階の渡り廊下から直接ナレッジキャピタルのビルに行けるように工夫を行った。当初は駅から直接繋がっている、南館にしか人が行かないのではないかと心配したが、北館にレストランを入れたところ、かなり流行っており、北館の方が来場者が多いくらいである。

(高橋座長代理)

- ・ グランフロント大阪の存在を知ってはいたが、東京ではマスコミにあまり取り上げられていない。全国に発信できるようなマスコミがその存在を知れば、食いつくと思う。マスコミはグランフロント大阪のことを知っているのか。
- ・ 年間10万円という高額な会費にも関わらず、サロンの会員は2,000人超とのことだが、企業として登録されているのか、一般市民個人が登録しているのか。

(宮原代表理事)

- ・ 会員のほとんどが個人である。大学の研究室10名で年間3万円/人にするなど、様々な割引システムを用意している。グランフロント大阪に行けば人と会えて食事もできる、という点で便利な場所であることが受け入れられているのではないと思う。また、最速のwi-fi(無料)を導入しており、PC環境がどこよりも良いことも入会を後押ししていると思う。
- ・ 東京で取り上げられることが少ないのは事実である。しかし、海外のマスコミは、頼まなくても向こうから取材依頼がくる。

(高橋座長代理)

- ・ 海外のマスコミはどうやってグランフロント大阪の存在を知るのか。

(高橋部長)

- ・ ホームページを日・英・中・韓の四カ国語で提供している。あとは、ロコミである。

(高橋座長代理)

- ・ 東京のメディアで紹介されれば、全国の人に知らせることができるのだが。

(宮原代表理事)

- ・ 東京のメディアに取り上げられなくてもよいと思っている。我々は世界を相手にしている。

(高橋部長)

- ・ 共同通信社などにより、地方では新聞記事になっている。

(小笠原教授)

- ・ 大阪の文化的な素地を上手く使っている良い例だと感じる。普通、サロンのようなものには日本人は集まらない。集まっているということは、原動力となるものがどこかにはあるはずである。「オモロイ」ものを出し続けられる文化的素地があることがすごいと思う。「対流」をどこまで産み出せるか、が今後の課題になると思う。
- ・ 他地域への展開を考えたとき、ナレッジキャピタルのような取り組みができる地域、できない地域は最初から決まっていると思う。できる素地のある街を見つけて、仕掛けていくことが大事だと思う。地方都市で実現させようとする、人を排除してしまう可能性もあると思う。

(宮原代表理事)

- ・ サロンを作る際、以下の工夫を行った。
 - 家具の選定時には、数を減らしてもよいから、良いものを選ぶようにした。
 - セルフサービスで飲食ができるようにした。
 - 情報を持っている、コミュニケーターという若者を11人、アシスタントとして配置した。
 - 受付のスタッフの制服や、きれいな花を生けるなど、細部に注意を払った。

上記のようなちょっとした工夫をしたことで上手くいったと思っている。年間10万円払う価値があると思われるよう、頑張りたい。

(小笠原教授)

- ・ 働き方が変わってきていることを上手く受け止めた取り組みだと思う。コワーキングスペースが増えている中、グランフロント大阪は、最高の環境だと思う。

(梶原座長)

- ・ 大阪には、世界に先駆けて為替取引を始めるなど、最先端に行く風土がある。

(宮原代表理事)

- ・ 今回のフロント大阪は、反発もあったが、過去の栄光にすがってはいけな、ということで始めた。

(藤井副局長)

- ・ 今後、日本でイノベーションを起こしていく上で、ナレッジキャピタルが一つのキーワードに

なってくると思う。国土のグランドデザインにも、スーパーメガリージョンを作る、という話が出てくるが、リニアによる人・モノの移動だけでなく、ナレッジのやり取りもできるようにならないとメガリージョンにならないと思っている。グランドデザイン中には、ナレッジリンクと表現しているように、ナレッジの拠点同士を結び付け、新しいコラボレーションを生みたいと思っている。

- ・ シリコンバレーはイノベーションを繋げるソフトが充実しており、イノベーションディストリクトと呼ばれている。日本が成長するには、大都市や地方都市におけるイノベーションと、地域間の連携が必要だと思う。ナレッジキャピタルは世界最先端の取り組みである。外国のイノベーションディストリクトとの交流・連携は考えていないのか。

(宮原代表理事)

- ・ 我々もその方向に向かっている。今はクラウドをネットワークでつないで大きくしようとしている。それが有機的に結合していくと、イノベーションディストリクトと呼べる規模になるかもしれない。
- ・ ノウハウをオープンソースにして始めて周辺の産業が育つのだと思う。ナレッジをオープンにしないことにはイノベーションは起こらないと思っている。

(高橋部長)

- ・ 知的生産をする人と、知的消費をする人のリアルな交流の場所を、拠点として繋ぐことの必要性はあるが、賑わいがないと、機械感を感じてしまう。
- ・ 世界との関係では、他国の首都が興味を持っている。競争に晒されている都市がナレッジキャピタルを作りたいと言っている。

(黒川特別参与)

- ・ 少子高齢社会に対してナレッジキャピタルはどう影響してくるのか。

(宮原代表理事)

- ・ 少子高齢化を解決するものはICTのような技術しかないと思っている。ナレッジの消費が大事だと思っている。
- ・ ナレッジキャピタルの研究会の中で、少子高齢化を共通のテーマとして取り上げようとしている。

(梶原座長)

- ・ メガリージョンでの連携は今後の課題である。歩行者生活圏で連携することも重要である。リニアで繋がるからといって、新たなものが生まれるとは限らない。今後の課題だと思う。

(3) 追加資料の紹介

- ・ 梶原座長より、追加資料について、資料をもとに説明があった。(以下、要旨)

【国土・地域空間の変容 レジメ案】

- ・ リアル空間とバーチャル空間、グローバル化とローカル化、国際標準化と個性化、物的資本と人的資本、筋肉労働と頭脳労働、のように、現在二極分化しているものを、今後繋いでいく必要がある。繋ぐにあたって、様々な領域の接点(インターフェイス)、交差点(インターセクション)、交流(インターチェンジ)に相当するものがIフロントであり、グランフロント大阪である。
- ・ リンダ・グラットン「ワーク・シフト」、フランス・ヨハンソンの「アイディアは交差点から生まれる」に今やるべきことが書いてある。

3. その他

- ・ 事務局(国土計画協会)より、第7回～第10回研究会(日時:2015年1月29日(木)、2月12日(木)、2月17日(火)、3月3日(火)、全日程とも14時～16時、場所:国土交通省 国土政策局会議室)の案内を行った。

4. 閉会

以上